

アンソニー・ギデンズの近代社会論

長 光 太 志

要 旨

本論ではギデンズの近代社会論を、『近代とはいかなる時代か』『モダニティと自己アイデンティティ』および『再帰的近代化』に収録された『ポスト伝統社会に生きること』という三つの論考をベースに検討する。まずはギデンズの分析する前近代社会と近代社会の構造を概観し、その理論的枠組みの中で、近代論者（近代の可能性を積極的に評価する論者）としてのギデンズが、どの部分に期待を寄せているのかを析出する。その後、ギデンズ理論の内部で、ギデンズの期待を裏切る可能性のある要素を指摘し、それに対するギデンズの態度を検討する。

キーワード 伝統、時間と空間の組織化、反復性、定式的真理、近代、脱埋め込み、再帰性、自己の再帰的プロジェクト

1. はじめに

近代とはいかなる時代であろうか。この問題を、近代に対する希望をもとに分析したイギリスの社会学者がいる。アンソニー・ギデンズである。彼は、近代が様々な問題を孕みつつも、まだ可能性に満ちた時代であるということを強調し、近代をテーマにした三つの論考を残している。『近代とはいかなる時代か』『モダニティと自己アイデンティティ』および『再帰的近代化』に収録されている『ポスト伝統社会に生きること』である。詳細なデータは参考文献表に譲るのでこちらを参照してほしい。本論では、この三つの論考をベースにギデンズの近代社会論を概観し、ギデンズ理論への批判的貢献を意図する。それは、ギデンズ理論の中に含まれている、ギデンズの期待と反する要素を検討する作業でもある。

2. 前近代社会の構造

ギデンズの近代社会論を理解する上で重要なのは、近代と前近代の相違を意識することである。前近代のどのような要素が、近代において何に変質したのか、それを理解するためには、まず伝統とは何であるかを把握しておかなければならないだろう。そこで手始めに伝統に関するギデンズの議論を追ってみたい。

伝統における時間と空間の組織化

ギデンズは伝統を「記憶と、とりわけ（中略）『集合的記憶』と密接に関連しており、儀礼を必然的にともない、私が〈真理の定式化した概念〉と称するものに関係し、『守護者』があり、そして、慣習と異なり、道徳的内容と感情的内容とが一体化した拘束力を有している（Giddens 1994 : p.63 : 訳 p.119)」ものとして捉えている。ギデンズが見出したこのような伝統の構造は、行為の反省的な捉え返しを作法化し、共同体の時間と空間の組織化の中に組み込むこ

とを目的として、伝統が備えた様式である。それは、個々の活動や経験を、過去—現在—未来という連続性の中に差し込み、同時に過去—現在—未来を規則的な社会的実践によって構造化していく。つまり伝統は、時間と空間とに一定の形式を与え、操作する手段なのである。もちろん、このような時間と空間との構造化による操作自体は、伝統とは異なる方式で、現代社会に生きる我々もシステム化している。また、伝統社会であっても、生活の上で立ち現われてくる新しい体験を既存の文化（時間と空間に与えた一定の形式）にフィードバックし、文化そのものを刷新してゆくことがある。さらに言うなら、伝統は新しい世代に受け継がれるたびに（再）解釈／（再）構成／（再）実践される必要があるため、ある意味、変化そのものからは逃れることが出来ない。では時間と空間の構造化による操作——ギデنزの言葉に従うなら「未来のコロニー化」において、伝統に独特な点は何であろうか。それは、変化を変化として意味付ける独立した時間的・空間的指標が殆ど存在しないという点にある。なぜなら伝統社会における時間は、「反復性」と不可分に結び付いているからだ。ギデنزによると「反復性」は、伝統が「完全無欠性」や「連続性」を志向しているために発生する現象であり、それは「定式化された真理」と「その実践」という形で発動される。反復行動は「未来を過去に押し戻そうとする」傾向を持っているのである。ギデنزが見出した伝統の構造——すなわち伝統の独特な時間と空間の操作システム——は、この反復性や完全無欠性を演出するものなのである¹⁾。

反復性と完全無欠性

もう少し詳細に見ていこう。ギデنزによると記憶と伝統は極めて類似したものである。それは、両者が共に現在との関連で過去を秩序付けていくものだからである。一般的に言うと、記憶は、単線的な自己理解に沿う形で理解され

ている。それは私たちが〈原因→結果〉という因果関係的な解釈枠組みを、アイデンティティの説明／理解の場に持ち込んでいるからだ。ところが実際は、私たちは過去の出来事をランダム・サンプリングして自己像を抽出しているわけではないし、そもそも私たちが過去の出来事として了解しているものは、多くの場合、都合の良い加工変形が加えられている。

このような事実を踏まえて記憶について考察するなら、記憶とは現在の私を物語る為に、無数にある〈過去の出来事〉の中から選び取られ意味付けられた情報をもとに構築されている、と考えた方が自然である。この時、現在の私なるものが、多分にその時々での社会的な諸関係に影響を受けている。ギデنزが記憶を〈社会的〉あるいは〈集合的〉な事柄であると理解し、集合的な記憶が伝統と深く結び付いていると考えたのは、私＝アイデンティティの構築的な側面を考慮に入れたからであろう。現在において私を規定する社会的諸関係の中で、大きな影響力を振るうものの1つに集合的記憶というものがあり、（前近代的社会においては）それが伝統と密接に関わっているのだ。なぜなら前近代社会では、伝統こそが、集合的記憶を組成する媒体として機能するからである。（Giddens 1994：p.63-64：訳 p.119-121）

もちろん現在の私が継続的な企てである以上、このような記憶の解釈作業も不断に再生産され続ける²⁾。こうした繰り返しこそが、私の連続性の源泉なのである。しかしこの論理は、同時に、全く逆の方向性を指し示すものでもある。前近代社会において、伝統が強固な参照点として現在の〈私〉に影響を与えるのは、〈私〉が伝統に反復性（反復を続ける連続体であるという認識）や完全無欠性を認めているからだ。この伝統を伝統たらしめる反復性や完全無欠性は、伝統の構成員である「私」達が持続的に伝統を解釈枠組みとして採用し続けることによって成立しているからだ。従って伝統は、〈私〉

の現在を基点にして過去を整除しているにも関わらず、過去に現在を縛り付けるものとして表出する。つまり伝統とは過去を位置付ける為の1つのフォーマットなのだ。前近代社会とは過去の位置付けが一様な表現形態しか採らないが故に安定している社会なのである。そしてこのような前近代社会の中で、伝統の実践的側面に関わる要素が「儀礼」や「守護者」なのだ。

儀礼と守護者

通常、伝統は儀礼と不可分である。なぜならこれまでの議論で確認してきたように、伝統には、能動的な解釈作業が必要であり、その解釈作業の実践的手段こそが儀礼であるからだ。ギデンズは、集合的記憶の、社会で行われる実際の活動と連動することで保持されている側面を強調する。儀礼は、まさに集合的記憶の実践として、過去の連続的再構成と人々の具体的な行為とを結び付けていくものなのである。ただし、この種の儀礼が、社会生活の中で発生する実務とは切り離される傾向にある点には、注意しておかなければならない。儀礼は、社会生活上の実務から切り離されることで、外示の意味を失い非表出的言語として稼働しだす。非表出的言語とは、言語の意味するものを正確に知らなくとも、その言葉が発せられたという遂行的な状況が何らかの機能を担う言語の事である。伝統における儀礼が非表出的言語として成立するのは、社会生活の実務とは異なる水準で儀礼の意味付けが行われているからである。(Giddens 1994 : p.64-65 : 訳 p.121-122)

この社会生活と異なる水準にあり、儀礼を意味付けるものを、ギデンズは「定式的真理」と名付けている。定式的真理とは〈連続性／反復性〉や〈完全無欠性〉に接続されることによって、自己のアイデンティティの安定点を得ようとする自我の欲望から生み出される共同幻想であろう。多くの場合、定式的真理はローカルな時間・空間と密接な関わりを持って成立してお

り、伝統が伝統として確立していく過程で、このようなローカルな時空は自他の区別を明確化し、定式的真理（共同幻想）への参加圧力を強める。もちろん定式的真理が全く外的環境に適応的でない形で発展し続けると、その伝統が衰退の道を歩み最終的には消滅するか、あるいはその伝統を信奉したまま該当集団が瓦解する場合もある。しかし先ほどからも述べているように、伝統は、「変化を変化として意味付けない」だけで、現実的には「解釈／構成／実践」によって柔軟に姿を変化させるため、十分に生き残っていく余地を含んでいる。むしろここで重要なのは、定式的真理の合理的適応力ではなく、如何にして定式的真理が成員に受け入れられていくかという点である。

定式的真理を成員に受け入れさせていく機能を担うのは、非表出的言語としての儀礼である。その意味で儀礼は、定式的真理と相互補強の関係にあり、定式的真理によって、実践として位置付けられながら、実践されることで定式的真理の信憑性を高めていく。また、伝統社会においては、儀礼を意味付ける定式的真理の解釈権を持つ者達が限定されている。このことは、伝統社会の成員の中で、儀礼や定式的真理に対する反対意見が生ずる（つまり反対意見の存在が意識される）可能性を未然に防いでいく。儀礼は、意識されないくらい当然の事として身近にあり、それが何らかの真理と繋がっていると幻想させることで、伝統社会の秩序を維持しているのである。

ただし、定式的真理は儀礼によってだけ支えられている訳ではない。もう1つ「伝統の守護者」という要素を忘れる事が出来ない。前述の通り、伝統社会では、成員が、皆、平等に解釈する権利を与えられていることは稀である。多くの場合、伝統の、あるいはその実践としての儀礼の解釈は、ギデンズが「伝統の守護者」と呼んだ人々の手に預けられることになる。「伝統の守護者」達は、伝統的秩序の中の身分によっ

て、当該の伝統について（再）解釈／（再）構成／（再）実践する権利を保証されている。また現実現象を予測し統御するような機能に関しては、それが定式的真理の幻影から隔離されているような場合でも、技能そのものを秘匿し限られた者だけに伝承することで、伝統の守護者を媒介させ、定式的真理と結び付ける。逆に言うと、純粋に儀礼的な出来事に関して、守護者以外の伝統社会の成員達は、自らが行っている伝統的儀礼の具体的な意味や機能を理解していないことも多い。（Giddens 1994：p.64-65：訳 p.122-123）

現代社会に生きる我々の一般的な感覚では、合理的に意味や機能の理解が出来ないものに従っているのは、いかにも奇異に映る。しかし伝統社会の中では事情が少し異なる。儀礼はその外示の意味を失い非表出的言語として稼動している。そして儀礼は定式的真理と結び付き、反復性／連続性を演出する。この時、伝統社会という隔離度の高い世界に生きる成員にとって、儀礼は、守護者が定式的真理に基いて、何らかの事態に対応しているのだと理解されるのである³⁾。

このような、成員個々の過去と〈集団の過去〉を重ね合わせ、同時にその重ね合わせ方に立脚して「未来をコロニー化」する伝統は、成員に対し、「道徳的内容と感情的内容とが一体化」するような拘束力を発揮するようになる。伝統の形式に則ることで、時間と空間は了解可能な姿に再構成され、その構成に基いて成員は社会の中に位置付けられる。そのとき伝統が織り成す時空は、「なされる」事柄だけではなく、「なすべき」事柄も具体的に指示している。「未来をコロニー化」する過程において、「なすべき」事柄が道徳的な規範性を帯びていることは重要である。伝統的世界観から抽出されるこうした「なすべき」事柄は、伝統の守護者によって、日々の具体的な活動や指示の中に盛り込まれ、成員の不安抑制メカニズムとして機能する。

（Giddens 1994：p.65-66：訳 p.123-124）

こうして伝統はアイデンティティを支えるものとして働き出す。個的なアイデンティティにせよ、集合的なアイデンティティにせよ、アイデンティティは、自らを定位する超越的な根拠を必要とする。反復再現と再解釈が、「なすべき」事柄という姿をとっていることは、成員がアイデンティティの安定点を得るために必要なことなのである。こうした仕掛けは、伝統社会の内部で生きる人々に、伝統への強い感情的執着を呼び起こす。そのため、伝統の所有する定式的真理（その継続性ないしは完全無欠性）への脅威は、普遍的ではないにせよ、多くの場合、自己の完全無欠性への脅威として経験されているのである⁴⁾。

さて、ここまでギデンズによる前近代社会における伝統の構造を概観してきた。ギデンズの描き出す伝統は、前近代社会の人々が、時間と空間に対して、意味を与える事によって秩序付け、意味を与える事によって操作する過程であった。もちろん世界に与えられる意味とは、基本的には幻想であり、伝統社会とはその幻想を強固に共同化する条件が揃った社会であったと言えるかもしれない。ギデンズが構想するような前近代的社会においては、成員は、個人という単位を意識することなく、特定の世界観の中に没入出来たのである。ではギデンズは、近代社会において、伝統社会の何が変質し、何が生み出されたと考えているのか。その論理について章を改めて追ってみることにしたい。

3. 近代社会の構造

近代社会は、前近代社会において支配的であった伝統を支える条件が、著しく空洞化していく。空洞化が始まる起源を特定することは難しいが、ギデンズが見出した以下にあげる要素が主要因として近代化を起動させ加速させているのは間

違いはないだろう。それぞれ前近代社会の構造と対比する形で議論を追ってみたい。前近代社会の論考で使用した章立てになぞらうように近代社会の論考も組み立ててある。

時間と空間の分離

前章で見たとおり、前近代社会の伝統——あえて言うなら共同幻想は、その伝統を信奉する成員たちが存在する生活空間と緊密に結び付いていた。そして伝統が、空間的な意味付けだけではなく、時間的な意味付けも担っている以上、必然的に時間と空間は密接に結び付いていた。言い換えれば、〈いつ〉は必ず〈どこ〉との関係性の中で語られており、あらゆる生活空間を捨象した、抽象的な時間が計測される必要はなかった。

このような伝統を介した時間と空間の結び付きに楔を打ち込んだのは、機会時計の発明であったとギデンズは言う。機会時計の発明と普及により、時間は、特定の場所と結び付かない抽象的な存在として測定可能になった。そして抽象的な時間の発見は、世界規模で標準化されるカレンダーの成立の呼び水となり、益々、時間の抽象化・均質化が進展することになる。(Giddens 1990 : p17-18 : 訳 p.31-32)

時間が機会時計によって抽象化されたように、空間を抽象化したのは世界地図である。ギデンズは、このことを、しばしば同義語として使われている空間 (space) と場所 (place) という語の意味の違いを説明する事から解きほぐしていく。場所とは、具体的に地理上の位置を占め、そこで行われている社会的活動と密接に繋がっている場 (locale) のことである。前近代社会では、社会生活が行われる空間的な広がりはある程度限定的であり、そこで誰が何をしているかという事は、かなり明確に把握できた。その意味で前近代社会の成員が思い描く世界の広がり、みずからが活動する領域とほぼ重なっていると言える。ところが近代における空間の

広がりはそうではない。近代社会は、社会活動の領域が飛躍的に広がり、個々人の生活空間を遙かに越え出ている。このことは、近代の社会活動が、目の前に存在する具体的な他者との関係以上に、間接的な不在の他者との関係を重視する傾向が強いことを示している。近代社会では、空間が直接的な現前 (presence) から遠く引き離されているのである。近代社会における空間は、「いま」「ここ」に存在する具体的な関係性からは抽象化され、標準化された概念として成立しているのだ。この点が、前近代社会の空間と近代社会の空間の大きな違いである。世界地図は、このような抽象化・標準化された空間を、見事に図像化してみせる。世界地図は、前近代社会の空間理解とは異なり、特定の場所を特権化しようとする意志が出来る限り縮小化されているのだ⁵⁾。世界地図あるいは地球儀にみられる地球の図像化は、結果として、特殊な場所や特定の地域から独立した空間を作り上げているといえる。(Giddens 1990 : p.18-20 : 訳 p.32-33)

このような時間と空間の抽象化は、近代社会に特有な別のダイナミズムの源泉となる。つまり時間と空間の抽象化によって、「脱埋め込み (disembedding) メカニズム」が進行するのである。ギデンズは、脱埋め込みメカニズムを「この脱埋め込みメカニズムは、社会活動をローカルな脈絡から『引き離し』、社会関係を時空間の広大な隔たりを超えて再組織していく (Giddens 1990 : p.53 l. 13-15 : 訳 p.73 l. 1-2)」のものであると定義している。それでは、次にこの脱埋め込みメカニズムについてのギデンズの分析を追ってみよう。

脱埋め込みメカニズムの進行

～あるいは抽象的システムの発展

脱埋め込みメカニズムの進行は、抽象的システム (abstract system) の発展によって促される。抽象的システムは2つの要素からなるシ

システムである。1つは象徴的通標 (symbolic token) であり、もう1つは専門家システム (expert system) である (Giddens 1990 : p. 22 : 訳 p.36)。象徴的通標とは、交換の際に媒介となり、しかも極めて広範囲に渡って流通することの出来るメディアのことである。ギデنزが象徴的通標の具体的な事例として言及するのは貨幣である (Giddens 1990 : p.22-27 : 訳 p.37-42)。前近代的社会は、当該の社会が必要とする最低限の物資に関しては賄うことの出来る、自給自足の共同体である事が多い。そこでは、社会の空間的広がりや限定されており、社会の分業体制もそれほどは確立されていないが故に、貨幣が近代ほど大きな意味をもち得ない。それに対して近代社会では、社会活動領域の拡大と分業体制の高度化から、全く見ず知らずの人間と、本来的には比較できないモノやサービスを交換する必要が生まれてくる。社会活動が広大な領域に点在する不特定多数の人間に対して開かれている場合、タイミングの合致によるモノやサービスの交換図式はもはや成立しない。そこでは、全てのモノやサービスを抽象化できる (経済活動に限定するならば、計量化できると表現しても良い) メディアの存在が不可欠になる。ギデنزが抽象的システムの一要素である象徴的通標を、脱埋め込みメカニズムを起動させ、加速させる要素であると考えたのは、まさに上記のような理由による。ギデنزが「脱埋め込み」というような概念で説明しているのは、交換が本来的に持つ特殊性——個々人が所有する別々のモノを、互いが欲しがった場合にだけ交換が成立するという——が、貨幣の、時空を超えて広範囲な領域でメディアとして流通する特性によって乗り越えられ、結果としてさらに広大な時間と空間を交換の輪の中に巻き込んでいくという事態なのである。貨幣は、それが何時・何処で・誰によって使用されるかには関わり無く一定の価値と交換可能性を所持している。そしてこの特性ゆえに、特定の

文脈に左右される事無く交換を可能にする。つまり時間と空間から自由な指標として成立しているのである。これが象徴的通標と名付けられたものの、典型的な特徴である。

専門家システムもまた、特定の時間的・空間的文脈から自由であるという点において、象徴的通標と同じ機能を果たすことが出来る。専門家システムは、専門家システムに従事している個々の専門家からも、専門家システムを利用している利用者からも、原理的には独立したシステムとして構想されている⁶⁾。専門家システムが保証する知識体系・技術体系は、誰でも順を追って説明されれば (時間はかかるかもしれないが) 理解できる合理的・論理的な体系であろうという信頼に基いて成立している。そしてそのような合理的な体系を機軸に据えたシステムであるからこそ、特定の脈絡に左右される事無く、精度の高い予測と統御が実行可能だと考えられているのである。専門家システムは、ある意味で前近代社会における伝統の守護者と近い存在であるかのように思われるかもしれない。しかし定式的真理に立脚し社会成員からは原理的に疑義を突きつけられない立場にある守護者と、意識的に透明性を確保している専門家システムとは、社会に与える意味合いに大きな違いがある。今日、ギデنزの提唱するモダニティがこれほどの猛威を振っている原因の1つは、定式的真理を放棄し、常に討議に対して開かれることを採用した専門家システムが、現実に対して効果的な知識・技能を獲得するシステムであったと言うことは出来るだろう。ただし、伝統が所持していたアイデンティティに対する不安抑制メカニズムの中で、守護者が果たしていた機能は放棄されることになった⁷⁾。この守護者と専門家の在り方を分ける知識の所有形式が、近代に特徴的なダイナミズムを形成する最後の要素である〈知識の再帰的な (reflexive) 所有〉と関わってくるのである。

さて、脱埋め込みメカニズムを促す抽象的シ

システムを成立させるのは、以上のような2つの要素である。敢えて付け加えるなら、象徴的通標は主に社会活動を特定の脈絡から切り離し、専門家システムは切り離された社会活動を抽象的で広範囲なシステムに帰着させる効果を持つと言って良いだろう。脱埋め込みメカニズムの進展は、埋め込みを解除し、別のシステムに移し変える抽象的システムの整備と不可分に結び付いているのである。

知識の再帰的所有

近代において知識は再帰的に所有される。それは知識が常に暫定的な結論に置かれ続けるということである。例えば、前近代においては、定式的真理と繋がる反復性や完全無欠性が知識を最終決定する根拠と成った。それは根拠として意識されないほど、日常化し、伝統的な行動様式に対して疑問を抱かなくなるような形式でシステム化されていた。ところが反省能力が高まり、それが社会生活の様々な場面で徹底的に働くようになった近代社会においては、知識（あるいはそこから引き出される世界観）は反省的に保有されるようになる。伝統はもはや伝統であること以外の妥当性をもつ知識によって正当化されることが必要となる。社会的実践が、当の実践に伴い発生する情報をフィードバックしながら、絶えず吟味・修正されて、その結果、その実践の性質を根本的に変えていくという事実こそ、ギデンズが近代社会の再帰性に関して指摘した重要な論点である。それは思考と行為との持続的な相互作用の過程である。モダニティにおける生活環境は、反省的に適用された知識によって形成されながら、同時に知識それ自体が常に修正されていく可能性を含んでいるため、変動的な側面を拭い去れないものになっている。反省能力は、一方で近代科学が生み出したさまざまな知識を批判的に社会へフィードバックすることでシステムの抽象度を高め、他方では抽象度の高まったシステムを制御するためのさら

にソフィスティケートされた知識を生み、近代という時代の持続的な構造変動の重要な原動力となっている。

特に社会科学の知は、前述したような反省能力と密接に結び付いている。教育やメディアを通じて、人々の生活の中に浸透を繰り返す社会科学の知は、同時に、人々の社会科学的な思考形式を育成してゆく。また、ある程度社会科学的な思考形式を育成された人々に対しては、その反省能力を引き出す媒介の役目も果たす。人々は、社会科学の知を受容し、それを基軸に自らの生活世界像を調整した上で、その中に没入してゆく。近代社会では、この循環を通じて、あるいはこの循環に焦点を当てて社会を捉える限りにおいて、社会は個人の行う社会的行為によって再構成・再組織されていくという主張が成り立つ。ギデンズが近代社会の眼目としているのもこの点である。さて、近代社会の主な特長は上記のように整理できるが、ここでギデンズの主張に言葉を足す形で、近代社会のリスクについても言及しておきたい。近代社会のリスクは、後にギデンズが評価する〈近代的な個人の在り方〉に対する疑問の基盤となる議論である。

近代社会のダイナミズムによって発生するリスク

社会システムの抽象度が高まるということは、その内部に様々なサブシステムが発生し、それらが複雑多岐に渡って並存するという点でもある。そして社会科学の知は、様々なレベルの抽象システムおよびそのサブシステムに対応した形で編成される。もちろん社会科学の知の具体的な提供者は、「伝統の守護者」などではなく、前述した「専門家（集団）」である。近代社会の専門家が、伝統社会の守護者と決定的に異なる点は、彼らが懐疑の精神に依拠している点にある。専門家は、自分の見解が、究極の真理などでは在り得ないことを厳しく自覚している。専門家の示す見解は、何処までいっても、

説明力に富み、検証に耐えてきた、高度な仮説に過ぎないのである。この専門家の態度は、(社会)科学の知を利用しようとする個人に、現状で手に入る(科学技術を主とした)情報に基いて、個々人の責任でリスク計算とリスク管理を行うよう要請する。

モダニティにおける抽象システムの発達は、科学技術との密接な繋がりを通じて、それ以前の社会にあった数々の不安とリスクを限りなく最小化した。しかし同時に、抽象システムの発達によって新たに発生するリスクも数多く存在する。例えば、国家システムによる暴力の独占は、警察機構や軍事機構として現実化し、近代以前の社会では考えられなかったほどの強度と安定性で、広範囲にわたる領域の治安を守っている。しかし同時に、近代以前には存在しなかった規模の暴力装置の成立が、資本主義と結び付いた結果、戦争を産業化し、地球を破滅に追いやって、尚、余りあるほどの軍事力/大量破壊兵器(核兵器・生物化学兵器 etc…)の地球規模での拡散というリスクを生み出している。この他にも、ボーダーレス化した世界経済や原子力発電や環境問題、小さなレベルでは教育システムの成立に伴ういじめ、校内暴力、学級崩壊など、抽象的システムゆえに発生/顕在化するリスクは数多い。

これらのリスクは、日常生活の背後に常に存在している。我々が、このようなリスクに対して取り得る態度は、大きく分けて二つある。1つは、モダニティが個人に要求してくる在り方を真正面から受け止める方法である。つまり手持ちの情報を出来る限り駆使して特定の専門家(集団)を選び出し、彼(等)の用意した抽象システムに関するメリット/デメリット/リスク/コストからなるシナリオを受け入れ、自己の生活を調整する方法である。もう1つは、そのようなリスクそのものを直視しないで、習慣的行動に精を出すというやり方である。自己の行動をリスクという観点から検証しなければ、

リスクに対する不安そのものを、「括弧に入れる」ことが可能になるからだ。近代社会のように、定式的真理が消失した世界では、このような習慣的反复性が、日々の生活が面々と続くイメージを湧き立たせ、アイデンティティの擬似安定点と成り得る⁸⁾。もちろんこのような行為は、モダニティに原理に反するものである。ギデنزの議論の中でも、このような習慣的行動は「嗜癖」と呼ばれ、この種の「嗜癖」による選択から特定の抽象システムが信頼されているかのように見える事態を〈凍結された信頼〉による抽象的システムへの不参加として警戒している(Giddens 1994 : p.90-91 : 訳 170-171)。

さて、以上がギデنزの示した近代社会の構造である。時間と空間の分離、脱埋め込みメカニズムの侵攻、知識の再帰的所有、これらは全て前近代社会における伝統が立脚してきたローカルで特殊な世界を相対化するものである。前近代社会の在り方と近代社会の在り方の最も大きな違いは、近代社会が、前近代社会ばかりか近代社会自身も相対化し続けるような、極めて可変的な要素をその機軸に据えているということだ(Giddens 1990 : p.141)。ギデنزはこの可変性の中に、様々な権力関係を相対化し、より自由で平等な(それを民主的など呼んでも良いかもしれない)社会の構築の可能性を見出す。しかし本論では、ギデنزのこのような見解に若干の疑義を差し挟みたいと思う。それは自由で平等な社会の構築に反対するためではなく、ギデنزの議論をより豊かに展開させたいからである。

4. ギデنزの近代的個人論の抱える矛盾

デングの前近代社会/近代社会に関する見解を検討する際、ギデنزが各時代の中に見出した諸要素が、どれだけ歴史的事実によって裏付

けられるのかといった批判形式をここでは採用しない。むしろ出来るだけギデンズの議論に密着してその論旨を追う中で見えてきた疑問点を展開させていきたい。

ギデンズの前近代社会／近代社会の分析の中で、曖昧なまま残されている問題は〈凍結された信頼〉をどのように扱うかという論点である。ギデンズは全ての社会関係に再帰性が働き出す近代を、特にそれらが徹底化されていく高度近代を、社会の様々な諸関係が問い直され、民主的に再構築される希望の時代として読み解こうとする。後期近代に特徴的な、モダニティの徹底化⁹⁾によるアイデンティティの再編作業も、基本的にはこの文脈の中で評価される。

自己アイデンティティと再帰性

～自己の再帰的プロジェクト～

もう少し詳しく見ていこう。ギデンズによれば、そもそも自己アイデンティティが論ずるべき対象として見出されている事自体が、極めて近代的なことである。なぜなら自己アイデンティティについて思いを巡らせることは、同時に他者に対して思考を働かせることと同義であり、自己意識は、他者との関係性の中においてしか呼び起こせないからだ。つまり、自己アイデンティティについて語りだすことは、初めから再帰的な思考形態（自己と他者を循環的に理解する）を受け入れるように運命付けられているとも言える。ギデンズ自身も「自己アイデンティティは所与の個人活動システムの継続の結果ではなく、個々の再帰的な活動の中で日常的に創造され、維持されるものである（Giddens 1992：p.52）」と主張している。身体的な感覚すら含み込む、一見、極めて個人的だと思われるアイデンティティの形成や維持が、他者や世界との再帰的な関係性の中でしか成り立たないこと、そしてそのことを改めて自覚し注目することこそ、近代の知の在り方が開いた新たな可

能性であるといえる。それは、自己アイデンティティという一貫したストーリーが、他者や世界との意識的な関わりの中で形成される再帰的なプロジェクトであると自覚することでもある。ギデンズの言葉を借りるなら、「近代の再帰性は自己の核にまで広がることになる。言い換えるなら、脱伝統的秩序という状況の中で、自己は再帰的なプロジェクトになる（Giddens 1992：p.32）」のである。

自己アイデンティティという再帰的プロジェクトは、具体的にはライフスタイルという具体的な行動様式を伴う。近代社会が進展し、モダニティの徹底化が進行すればするほど、定式的真理のような自己を規定する超越的な審級は影を薄め、自己アイデンティティの形成・維持のためのプロジェクトの比重が増す。つまりライフスタイルが益々自己の核心と関係するようになる。自己の内側に向けて語られる自己の物語は、望ましい未来の方向に向けて過去を調整し、外側に対してはライフスタイルとして表現される。そして一定のライフスタイルを選び取ったという事実が、再帰的に内に向かう自己の語りを強化・再編し、ますます望ましい未来へ向かうためのライフスタイルの選定を促す。近代特有のライフスタイルを通じて形成・維持される自己アイデンティティは、こうして社会との再帰的な関係を強固なものにしていく。蛇足ながら加えておくと、このような自己と社会との再帰的な関係は、アイデンティティや純粋な関係性の領域だけではなく、身体性の次元にも持ち込まれる。ダイエットやエクササイズや整形手術に見られる身体の改造傾向は、まさに身体に関するライフスタイルとして選び取られており、その限りで後期近代の進行と共に加速度的に増してゆくだらう。身体は所与の動かし難い対象ではなく、活動の一部となるのである。

近代社会構造の中の自己アイデンティティ

後期近代社会では、社会生活の多くの場面で、

選択肢が多数化し、選択という行為そのものが社会活動の基礎的な部分を成す。これは伝統的な定型が無く、生活世界が多文化／断片化している近代社会では、ある程度、受け入れざるを得ない事態である。また、現代社会の成員が、メディア（主にマスメディア）に媒介された経験と不断に接し続けていることも、この事態に拍車をかけている。メディアのグローバル化の進展によって、個人は、広範囲に渡って〈意味ある情報〉を取得することが可能になった。テレビや新聞が多種多様な生活スタイルを同時に並列させる現代社会では、かつての伝統社会と比べ、社会生活の「位置的地理」が大幅に変更されている。その結果、「物理的場面」と「社会的情況」との伝統的な繋がりが失われ、個人による「選択」の根拠付けの必要性が、ますます加速する。加えて、現代社会において、一般的に個人が「選択」の根拠として利用する専門家の見解は、「選択」の最終的な結論と成ってくれるわけではない（さらに、しばしば、専門家同士の間でも見解が食い違っている）。つまりモダニティの進行によって、個人の選択は複雑化／多様化されていながら、どのオプションを選択するべきかについて教えてくれるものが、ほとんど何も無いのである。こうした問題は、個人の〈アイデンティティの安定点を如何に担保すべきか〉という問題と密接に繋がってくる。

この点からも、現代社会ではアイデンティティの安定点としてライフスタイルが用いられるようになる。構造的に〈選択すること〉から逃れられない我々は、ギデンズの言うところの「個人が行う実践の、多かれ少なかれ統合された集まり」であるライフスタイルを定め、それを選択の基軸にしてゆく他、選択の根拠を成り立たせる手段を持たない。またライフスタイルは、選択の根拠と化してゆくが故に、自己のアイデンティティを物語る上で、必要な材料と形式を与えてくれる。結局、我々が日々下している決

断は、我々の行為に関する決断であるだけでなく、我々が〈如何なる人物であるのか〉を決定することに他ならないのである。ギデンズの議論に従うならば、モダニティの徹底化が進めば進むだけ、アイデンティティの安定点を確立するために、どのようなライフスタイルを選び取るかという問題が表面化してくると言える。

近代的自己の矛盾

ただし、我々は中立的な立場からライフスタイルを選び取るわけではない。ライフスタイルの選定には、初発の段階で、個人が埋め込まれた個的環境や当該社会（当該時代）の様々な力学が反映されていくからだ。ギデンズが描き出したモダニティにおけるライフスタイルは、その点で若干の矛盾をはらんでいる。ギデンズは、専門家が発する情報を基に意識的合理的にリスク／ベネフィットを計算する者だけを、ポスト伝統社会の理念的個人として描き出しているが、おそらくそれは〈ライフスタイルの選定〉という事態を狭義に設定しすぎである。自己の価値判断における立場や自分を誘惑してくる様々な感情（つまり自らに働いている社会的力学）を自覚し検証を加え、その上で積極的に抽象システムに参加する様式だけを、〈選択されたライフスタイル〉として捉えることは、後期近代社会に生きる成員を極端に限定し、後期近代社会という時代区分そのものに懐疑を抱かせる結果になる。それよりもむしろ、ギデンズが「凍結された信頼」とよんだ慣習的行動（極端な場合として嗜癖）や従来の伝統的なものにコミットする生き方も、モダニティで選択されるライフスタイルの一形態だと考えた方が良いのではないだろうか。ギデンズが指摘したモダニティの徹底化が、現代社会において進行しているのは間違いない。またモダニティの徹底化によって伝統が相対化され、伝統社会に見られた不安抑制メカニズムがその力を弱め、結果として、ライフスタイルによるアイデンティティの確立

の重要性が増していることも間違いないだろう。しかし、そのことから、後期近代社会では〈理想的な抽象的システムのリスク管理を引き受け、再帰的プロジェクトとしてのライフスタイルを積極的に選定して生きていく生き方〉と〈そのようなモダニティの要請に耐えられず慣習的行動や伝統にコミットしてしまう生き方〉という二項対立が生まれていると結論付けるのは尚早である。むしろ〈モダニティが徹底し不安が恒常化した社会という時代状況のもとで、個人がその状況を踏まえどのようなライフスタイルを取り得るのか〉ということが問われるべきなのではないだろうか。こう考えたとき、ギデンズは、自らが構築した理論の中にあるもう一つの可能性に対して、故意に考察を進めていないようにも思われる。ギデンズのモダニティに関する一連の議論は、ポストモダンの論調に見られる近代性への間断ない懐疑とそこから発生せざるを得なかった遂行的矛盾に対して、近代社会の可能性を今一度再生させるというモチベーションに貫かれている。このこと自体は評価されるべき試みであると考えられる。ただギデンズが求めた近代社会の可能性の背後には、もう一つ別の否定的要素が刷り込まれているように思われる。ギデンズ自身も、伝統から切り離され、制度的再帰性とも連動しない場合に嗜癖化する行いが、近代社会では不可避に生まれることを指摘している（Giddens 1994 : p.71 : 訳 p. 135）にも関わらず、その問題に対する明確な対策や論評をしていない。この問題は、ギデンズが支持する近代の可能性と同根の社会構造から生まれる問題である。その意味で、ギデンズのモダニティの議論を支持する人々が避けて通れない問題でもある。

5. 今後の課題

ギデンズが行った前近代的社会・近代社会に対する分析は秀逸である。また様々に問題を孕

む現代社会の中から、何を救い出し、何を拡大していくべきなのか、というモチベーションに貫かれた論考であることも高い評価を受けるに値するものであると考える。本論では、そうしたギデンズの議論を詳細に追い、前近代的社会と近代社会を比較する形で、両者の置かれた状況を概観してみた。その中で見えてきたものは、近代を近代たらしめた世界観の変容であった。個々具体的な状況に埋め込まれていた、そして埋め込まれることで個的にも集団的にも秩序を保ち続けていた伝統が、不断の懐疑に貫かれ、抽象化と再帰性によって加速度的な変化を常態化する近代に変貌してゆく。ギデンズが析出した概念は、それらを捉えるのに当たって有効な概念であることは間違いないだろう。しかし同時にギデンズが整備し組み上げた理論を通すことで見えてくる新たな問題もある。ギデンズが信じる近代の可能性は、不断に変化し続け、より良い方向を模索してゆくような個人と社会のあり方である。それは近代の制度特性が、どんな物理的リスク（環境問題や戦争等）を抱えていても、現状に甘んじず変化を求めて行くという一点において希望を孕む。しかしギデンズのモダニティ理論の中に、そうした変化から逃避する、あるいは変化し続けることの苦痛を訴える人々の萌芽が見え隠れする。それはギデンズの希望を、根本的に覆す可能性を秘めている。ギデンズの問題関心を引き継ぐ論者は、今後、この問題の整理と回答とををする必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 伝統における知のフィードバックと近代社会のそれをどう考えるかは重要なある。伝統的な知が硬直したものであるわけではないからだ。両者の違いは知の形式と流通の仕方に現れるのである。
- 2) 近代社会において〈私〉が継続的な企てであるということと、伝統社会においてそうであるということの間には、実は大きな相違がある。私がどう企てられるか、それが近代と前近代の

重要な分節点の1つである。伝統社会の企ては連続性を保つために再生産され続けるが、それは極めて単純に終着を迎える企てである。近代社会の企てが、原理的にエンドレスであること対比すると、その違いは鮮明である。

- 3) このような傾向そのものは、完全に伝統に独特な傾向ではない。現代社会においても専門家集団の判断を、社会の成員が完全に合理的に理解しているわけではなく、1つの信憑として受け取っていることは多い。このことに関する詳しい議論は、後述の専門家システムやライフスタイルの議論を参照してほしい。
- 4) 伝統の危機的状況が、もっとも顕著になるのは近代的な状況においてである。伝統とは異なる原理の流入が、伝統に対する強い危機意識を誘発し、それまで無意識的であった伝統に「伝統」という明確な形を与える衝動を生む。
- 5) デンズの論旨には一定の理解が示せるとしても、世界地図の例えはあまり適当ではないかもしれない。ここでは世界地図よりも、地球儀を想定した方が良好だろう。
- 6) ただし原理的に構想されているということ、完全に抽象的なものとして運営されているということの間には若干の差異がある。あくまで前近代社会に比べて、個々の(権力を持つ)専門化がシステムに介入し難いということである。
- 7) もちろん伝統が所持していた不安抑制メカニズムは、専門化が守護者の位置を占めれば回復されるというような種類のものではない。モダニティによる変化は、もっと全面的・構造的なものだからだ。
- 8) しかし、あくまでそれは擬似的なものであるという見方も出来る。嗜癖は逃避行動の一種であるからだ。
- 9) モダニティとは、時間と空間の分離、脱埋め込みメカニズムの発達、知識の再帰的所有という近代社会に特徴的な要素を、一纏まりの特性として取り扱う場合に、ギデنزが採用している名称である。

文 献

- 1 Beck, Giddens, Lash 1994 *Reflexive Modernization*, Polity Press. = 松尾精文, 小幡正敏, 叶堂隆三訳, 一九九七, 『再帰的近代化』, 而立書房
- 2 Giddens, A. 1990 *The Consequences of Modernity*, Polity Press = 松尾精文, 小幡正敏訳, 一九九三, 『近代とはいかなる時代か』, 而立書房
- 3 ———— 1991 *Modernity and Self-Identity*, Polity Press
- 4 ———— 1992 *The Transformation of Intimacy*, Polity Press = 松尾精文, 小幡正敏訳, 一九九五, 『親密性の変容』, 而立書房
- 5 田口富久治, 1990, 「アンソニー・ギデنز『近代性の諸帰結』」, 名古屋大学法政論集(通号141)
- 6 宮本 孝二, 1992, ライフ・ポリティックスの時代 — ギデنزのモダニティ論をめぐって, 桃山学院大学社会学論集26(2)
- 7 名部 圭一, 1994, アンソニー・ギデنزの近代社会論 — 近代としてのポストモダン, ソシオロジ38(3)
- 8 小幡 正敏, 1995, 「近代のなかのリスク」, 論集(通号36)
- 9 服部 徹, 1997, A. ギデنزの近代国家論 — 国家と市民社会をめぐって, 東京経大会誌(通号201)
- 10 中西真知子, 1998, 帰性と近代社会 — ギデنزの再帰性概念の徹底化を論じる, ソシオロジ43(1)
- 11 時安 邦治, 1999, 文化とアイデンティティの政治学のための予備考察, 人間科学研究(通号1)
- 12 中西真知子, 2003, 再帰性とアイデンティティの観点からの近代化論 — ギデنزの再帰的近代化の時間的空間的広がりをめぐって, ソシオロジ47(3)(通号146)

(ながみつたいし)

佛教大学社会学研究科博士課程)

Modern Society Study of Anthony Giddens

Taishi Osamitsu

This paper represents my first discussion of Anthony Giddens' modernization theory which analyzed changes of in identity. Beginning with an overview of Giddens' theory, his expectation for modern societies is focused on. The central point of Giddens' expectation is that identities are selected as reflections of the trends of modernization. An attempt is made at criticizing Giddens' view by applying his own theory. The main point of this paper is an exploration of both the possibilities and the limits of Giddens' theory.